東北地方における縄文時代早期前葉の土器編年

－特に厚手無文土器と押型文土器・局部磨製石鏃の関係について－

相原 淳一（東北歴史博物館）

1. はじめに
2. 宮城県仙台市下ノ内浦遺跡出土土器
3. 類例の検討
4. 日計式以後について
5. 黒曜石製局部磨製石鏃について
6. 仮称「下ノ内浦式」土器の年代
7. おわりに

1. はじめに

東北地方における押型文土器は、縄文時代早期前葉・前期前葉・中期初頭・晩期中後葉に出現する（相原 1988）。このうち、前期前葉の押型文土器は野口貝塚ほか青森県下に分布し、北海道の温根沼式・朱円式に併行する時期である。稀少例ながら岩手県塩ヶ森 I 遺跡出土の押型文土器は、伴出関係から中期初頭の北海道の多寄式土器の搬入品の可能性が高い。晩期中後葉の押型文土器は山形県砂川 A 遺跡ほか、福島県・新潟県に分布する。本稿において扱う早期前葉の日計式土器は、東北地方全域から北海道南部にかけて出現し、早期中葉の沈線貝殻文土器群以前に位置づけられる。

前稿の「宮城県における日計式土器とその周辺－東北歴史博物館所蔵資料から－」（相原ほか 2021：当館『研究紀要』22 号所収）では宮城県白石市松田遺跡・鍛冶沢遺跡出土の日計式土器について検討した。本稿は、その続編として宮城県仙台市下ノ内浦遺跡出土の押型文土器および共伴する厚手無文土器や石器に検討を加え、東北地方における縄文時代早期前葉の土器編年について考察する。

2. 宮城県仙台市下ノ内浦遺跡出土土器

遺跡は仙台市太白区長町 4 丁目に所在する。遺跡調査は数次にわたって行われており、ここで取り上げるのは、1982 年に発掘調査が行われ、1988 年に仙台市文化財調査報告書第 115 集と 1983・84 年に発掘調査が行われ、1996 年に仙台市文化財調査報告書第 207 集に掲載された分である [1)]。

遺跡は広瀬川と名取川にはさまれた郡山低地の笊川の現標高 11 ～ 12m の自然堤防上に立地する。

（1）1982 年調査（図 1）

検討対象とする土器は、地表下約 3m の標高 8.5 ～ 8.8 m の XII 層・XIII 層から発見されている。XII 層は粘りが強いオリーブ褐色～灰オリーブ色の粘土層で上面からは土坑が検出されている。XI 層明黄褐色砂質シルト層（無遺物）が全体を覆う。上層の XII 層から発見された土器には、後出の野島式併行の条痕文土器が攪乱的に混在しているが、下層の XIII 層および 1983・84 年調査区からは条痕文土器は全く出土しておらず、ここでは除外する。

XIII 層は堅くしまった緑灰色～暗オリーブ色粘土層で、上面からは土坑・集石が検出されている。以下 XIV 層は緑灰色砂層（無遺物）である。

XII・XIII 層出土土器はほぼ同じ内容の土器からなる。器厚は 6 ～ 11mm で、胴下部は 13 ～ 15mm 前後の厚手無文土器が多い。胎土には長石・石英を多く含み、わずかに繊維が混和される土器がある。口縁部は外削ぎのやや尖頭状をなすものや円頭状のものが多く、口縁直下に太い沈線紋を 1 条めぐらしたもの（1・2）がある。底部は平底（多）と尖底ないしは丸底である。器面調整はナデのほかに、ミガキ、ケズリ、縦位条痕文（79）があり、内外面にミガキが施された大型品がある。

押型文土器が 1 点（78）出土している。器厚 10.5 ～ 12mm の大型の厚手土器で胎土に繊維を含

まない。原体は「2 本一組の縦割文の間に重層山形文が描かれる」[2)]。

（2）1983・84 年調査（図 2）

1982 年調査区の西南西約 80m の Ⅳ 区の 18 ～ 25 層で遺構が検出され、標高 9.2m 付近の 20 層では竪穴住居跡が 2 軒切り合って確認されている。20 層が黒褐色の砂質シルトになっており、旧表土とみられる。地点が離れているため、不詳であるが、1982 年 XIII 層上面の土坑や集石の遺構面が 1983・84 年の 20 層上面の遺構面に相当するものと思われる。

発見された土器の特徴は、1982 年の調査区出土のものと基本的に同じである。器厚 6 ～ 11mm で、胴下部は 13 ～ 15mm 前後の厚手無文土器が多い。胎土には長石・石英を多く含み、わずかに繊維が混和される土器がある。口縁部は外削ぎのやや尖頭状をなすものや円頭状のものが多い。底部は平底と尖底ないしは丸底である。器面調整もほぼ前記のとおりである。

押型文は菱形文を基調とし、57 は雷文状の精緻な組手が菱形状を構成する。原体末端に平行線状文を配するもの（57）がある。押型文と押型文の間

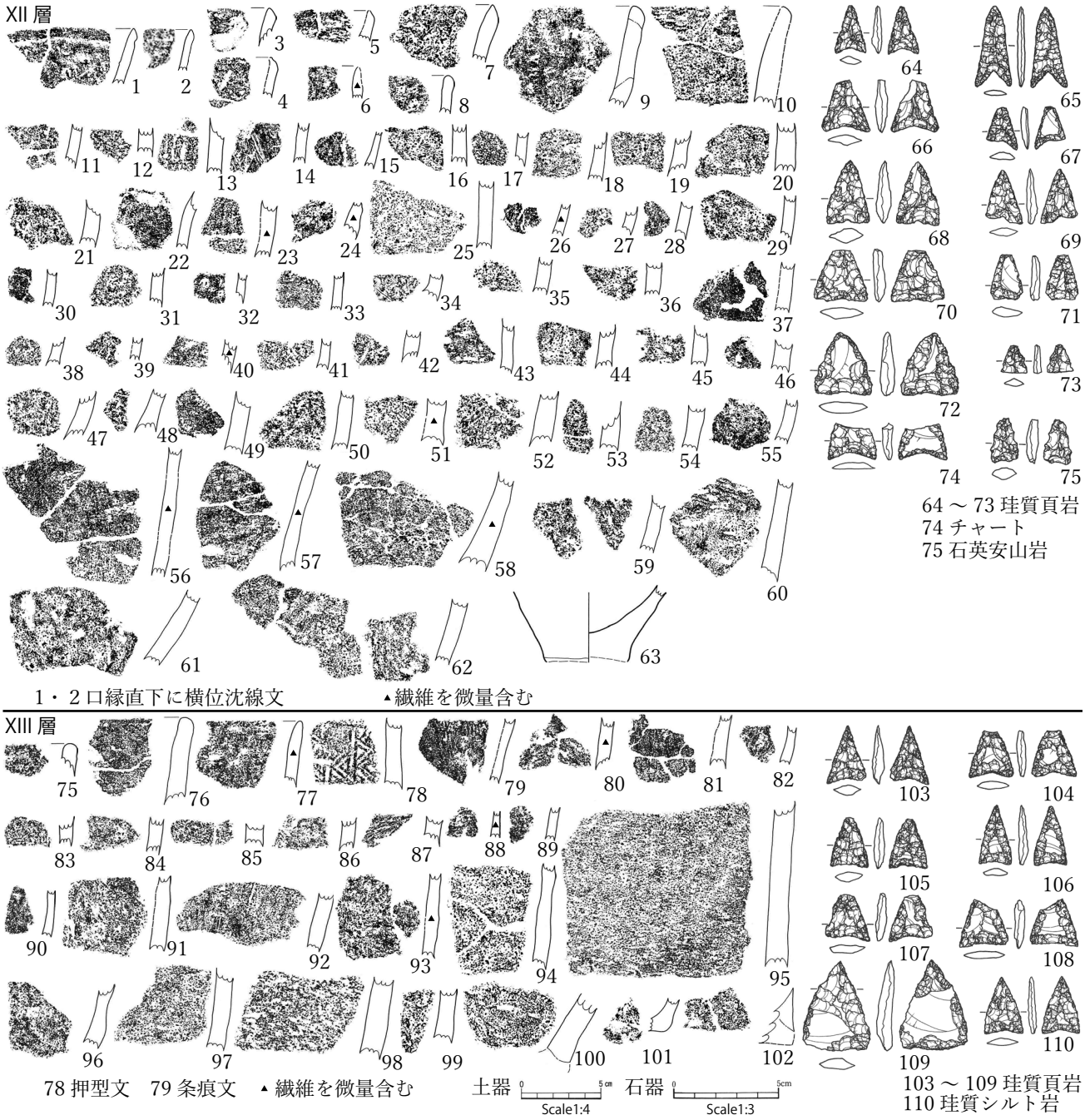


図 1　宮城県仙台市下ノ内浦遺跡出土土器・石鏃（1）　仙台市教育委員会 1988 から構成

には無文部を残す横位帯状施文とし、原体末端の平行線状文または横位沈線文（58）によって画される。

1982 ～ 84 年の調査を通じて、縄文・撚糸文施文土器、あるいは三戸式土器は出土していない。

尖頭器・石鏃等の剥片石器や礫石器も多く出土している。ここでは、石鏃のみを再掲する。

図 2　宮城県仙台市下ノ内浦遺跡出土土器・石鏃（2）　仙台市教育委員会 1996 から構成

3. 類例の検討

東北地方で発見される縄文早期の押型文土器は日計式（吉田 1951、江坂 1957）である。特に年代的検討では青森県唐貝地貝塚・岩手県蛇王洞洞穴遺跡の果たした役割は大きい。これらを概観した上で、宮城県松田・鍛冶沢遺跡の日計式土器と比較する。

(1) 青森県六ヶ所村唐貝地貝塚（図３①）

1950 年 8 月に唐貝地貝塚（二本柳ほか 1957、佐藤・渡辺 1958、佐藤 1961）の調査が行われた。唐貝地貝塚貝層下土層出土土器には、同県早稲田貝塚最下層から上層の土器が含まれないことから、唐貝地下層土器は早稲田貝塚以前に位置付けられ、唐貝地下層 a（縄文）, b（無文 + 横位平行沈線文）押型文→唐貝地下層 c（格子目文 + 刺突文）とした。押型文と縄文の併用文土器があり、「押型文は唐貝地下層 a に伴うことは明らかで恐らくはその他の土器にも伴うであろう」とし、花輪台 1 式に近いものの花輪台 2 式以降とした。

唐貝地下層 b 類は、口唇部が顕著な内削ぎ状を呈し、三戸式土器と共通する。胎土には繊維が混和され、横位平行沈線文が配される厚手の土器である。c 類は格子目文に細かな円形刺突文が加えられ、秋田・岩手・宮城県下の三戸式併行の土器にみられる。貝層下土層のために共伴関係は明らかではないが、唐貝地下層 a 類縄文 + 押型文→ b 類・c 類の編年が考えられよう。下ノ内浦遺跡例はいずれの土器にも該当しない。

(2) 岩手県住田町蛇王洞洞穴遺跡（図３②）

1964 年に岩手県住田町蛇王洞洞穴遺跡の調査が東北大学によって行われた（芹沢・林 1965・1967）。最下層の第 VII 層出土土器が一括して「日計式」とされたが、第 VII 層は粗粒の砂層であり、出土土器はいずれも小片で遺存状況は悪い。第 VI 層からは蛇王洞 II 式（三戸式後半に併行：相原・佐藤 2021）土器がまとまって出土している。

押型文は日計遺跡にみられる典型的な重層山形文に横位平行沈線文を加えたものである。縄文施文土器の平坦口縁上面に連続する刻目文や押圧縄文（縄の側面圧痕文）は新潟県室谷洞窟遺跡や青森県櫛引遺跡に類例があり、縄文草創期に属する。無文土器は器厚 4mm ほどの指頭状圧痕の著しい薄手のものと、7mm ほどの 2 種がある。下ノ内浦遺跡例はいずれの土器にも該当しない。

(3) 宮城県松田・鍛冶沢遺跡の日計式土器（図 4）

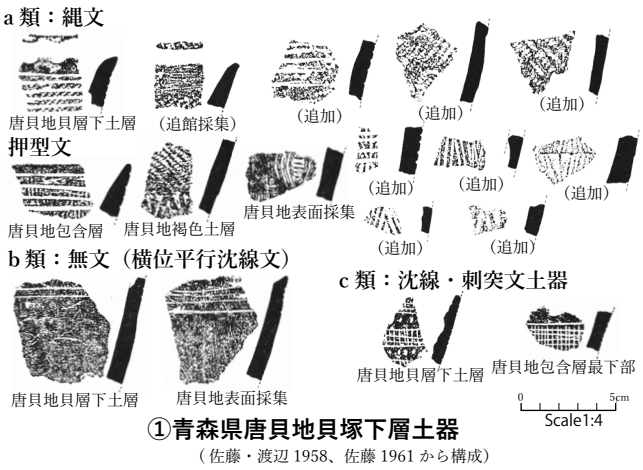
当館研究紀要 22 号の検討を要約する。

①縄文　白石市松田遺跡第 1 次第 1 号住では斜行縄文が単純に横帯施文を重ね、帯を入れ替えて横位羽状の構成となるものがある。第 2 次調査では横帯の中に山形状や菱形状に整えられた横帯非結束羽状縄文がある。

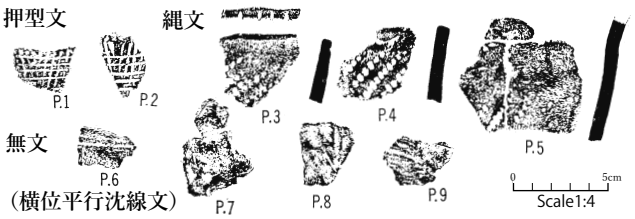
蔵王町鍛冶沢遺跡では、縄文施文土器そのものが僅少で、押型文土器が多い。

②押型文　松田遺跡第 1 次第 1 号住、重層山形文・重複菱形文のみの構成である。松田遺跡第 2 次調査では、重層山形文・重複菱形文内部を斜線で充填するものがわずかにみられる。

鍛冶沢遺跡では、「V 字状押型文」（武田 1969）や「菱形格子目文」（相原 1978）などの異種押型



①青森県唐貝地貝塚下層土器
（佐藤・渡辺 1958、佐藤 1961 から構成）

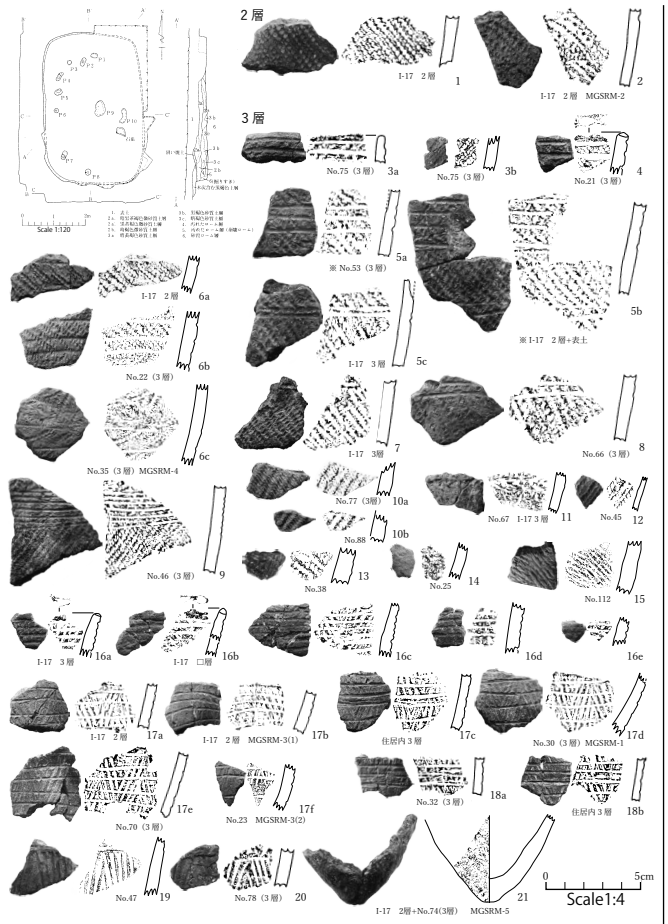


層	文　様	3.5	4.0	4.5	5.0	5.5	6.0	6.5	7.0	7.5	8.0	8.5	9.0	9.5	10.0	計
VII	縄　文								1	1 1						3
	押型文						2									2
	無　文※		2	1					2							5
			2	1			2		3	2						10

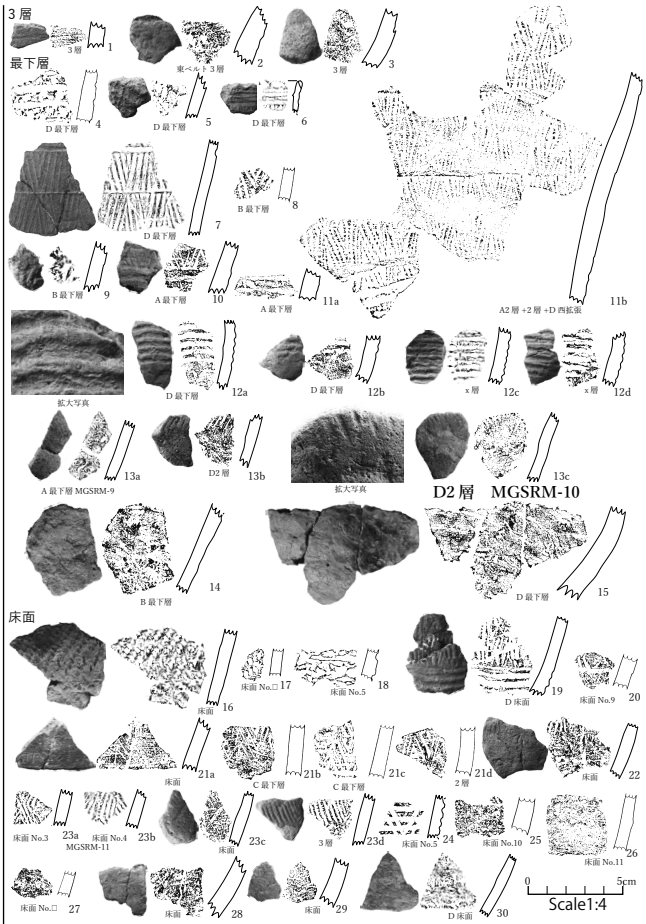
※図示された4点と表の5点は点数が合わない。ここでは芹沢・林1965・1967のママ。
VII層出土土器の器厚分布

②岩手県蛇王洞洞穴遺跡VII層出土土器
（芹沢・林 1965 から構成）

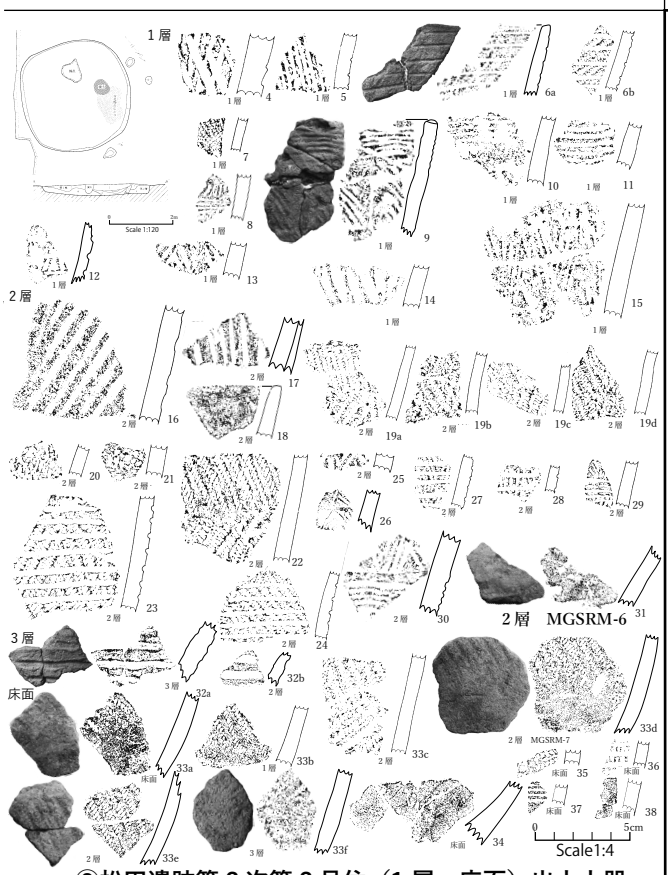
図 3　青森県唐貝地貝塚・岩手県蛇王道洞穴遺跡の日計式土器



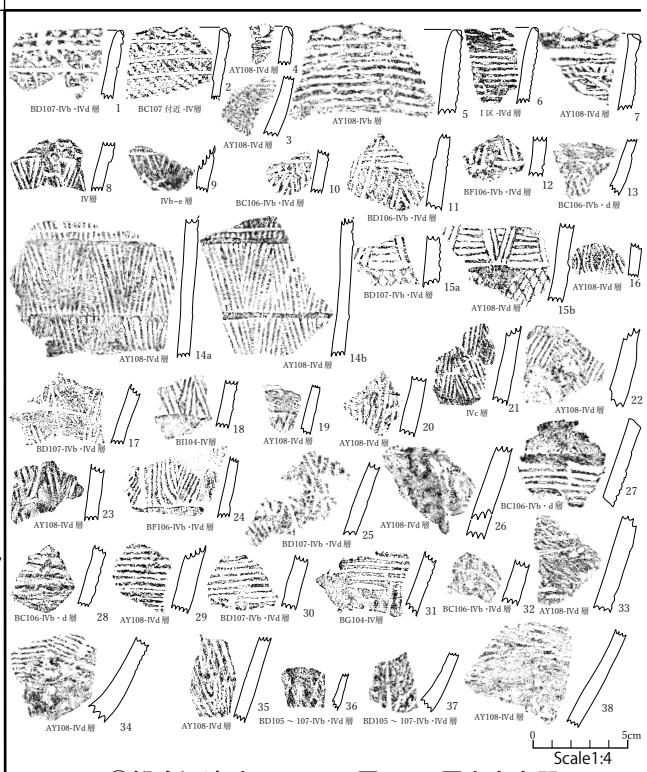
①松田遺跡第 1 次第 1 号住（2 層～床面）出土土器



②松田遺跡第 2 次第 1 号住（3 層～床面）出土土器



③松田遺跡第 2 次第 2 号住（1 層～床面）出土土器



④鍛冶沢遺跡Ⅳb・Ⅳd 層、Ⅳd 層出土土器

（①～④は相原ほか 2021 から構成）

図 4　松田遺跡竪穴住居跡（1 次 1 号住・2 次 1 号住・2 号住）・鍛冶沢遺跡出土土器

文が豊富である。図 4 ④ 24 は縦刻の平行線文間に変形した重複菱形文を充填している。鍛冶沢遺跡に類似する押型文土器は、山形県羽黒神社西遺跡において確認される。

③無文　松田・鍛冶沢遺跡ともに、胴下部の無文部である。唯一の例外として、松田遺跡第 2 次 2 号住 2 層から出土した土器（図 4 ③ 18）がある。外面は丁寧に磨かれた厚手の無文土器で胎土が異なり、関東地方からの搬入品の可能性が考えられた。

以上、下ノ内浦遺跡例は、松田・鍛冶沢遺跡例とは土器の胎土や文様において大きく異なり、典型的な日計式とはむしろ相違点の方が際立っている。

4. 日計式以後について

（1）山形県日向洞窟・尼子岩陰遺跡（図 5 ①②）

山形県高畠町日向洞窟の出土遺物を整理した加藤稔（1961）は、第 I 洞窟第 III 層から出土した日向 IV 類土器（無文土器）に「三本の横の平行直線の間に山形状のくずれた文様が組み合う」特異な押型文土器 1 点（IVc 類：加藤 1967 第 2 図、相原 1988 資料 86 再掲）があり、IVb 類（口縁部が短く外反）・IVc 類（口縁部直口）の尖底・平底土器に伴い、神奈川県平坂貝塚に類例が求めた。日向洞穴の無文土器は「口縁は平縁、断面も平らまたは丸いものが多い。ほとんど直立しているが、多少内弯ぎみ。厚さ 5 ～ 8mm。平均 6.5mm。そう厚くない。文様はなく土器の内・外面に器面調整の際にできたと思われる擦痕が認められるものが多い。器壁には石英・長石を含み、より薄手のものはわずかに繊維を含むものがある」（加藤 1958）。

尼子第 II 岩陰第Ⅲ層からは日向 IVb 類に類する大量の無文土器が出土し、「尼子式」と称し、関東地方の「平坂式」に併行するとした。中には、連続山形の沈線文が含まれ、撚糸文土器群末期の無文土器群に伴う初期沈線文とした。尼子第 II 岩陰においても、三戸式土器は出土しておらず、ともに早期中葉以前の様相として把握される。

加藤は高畠町の洞窟遺跡出土土器の総括を行う中で「日向 IV 類土器」は「日向 V 類土器」（加藤 1967）、「日向 VI 類土器」（山形県編 1969）、「尼子式」は「尼子 II 式」（加藤 1967・山形県編 1969）に改称された。

下ノ内浦遺跡例に最も類似する一群の土器として理解されるが、「日向 VI 類」「尼子 II 式」とするには、調査の詳細の公表を待たねばならない。

（2）福島県福島市獅子内遺跡 VI 区（図 5 ③）

調査は 1998 年に行われた（福島県教育委員会 1999）。福島市西方の摺上川上流に遺跡は立地する。

1 は横位帯状施文の押型文土器である。器厚約 10mm の厚手で、胎土に繊維を含まない。雷文状の組手が菱形状を構成し、両端には 2 条の平行線状文が配されている。下ノ内浦遺跡の押型文（図 2- 57）の意匠に酷似する。外削ぎ状の厚手無文土器（5）も出土しているが、共伴関係は不明である。縄文施文土器や三戸式土器は出土していない。

（3）神奈川県横須賀市平坂貝塚（図 5 ④）

調査は 1949 年に明治大学考古学研究室によって行われた（岡本 1953）。貝層下の混土貝層から縄文・撚糸文土器（夏島式）、貝層を中心にその直上および直下から無文あるいは擦痕の土器（平坂式）が出土した。器厚は 8mm 前後のものが多く、底部はそれより厚くなり 10 ～ 15mm 前後の丸底に近い尖底である。口縁直下には沈線状の凹みを有するものや、外削ぎ状の口縁があり、下ノ内浦遺跡の無文土器に類似する。石英・長石の細片をわずかに含むものが多く、胎土は軽鬆な感じがするが、繊維は混和されない。押型文土器は貝層、貝層直下から出土している。1 は両端に平行線を配した山形文である。無文部をおいて横位帯状施文をする構成は、千葉県沖ノ島遺跡（千葉大学考古学研究室 2004・2006）にも見られ、下ノ内浦遺跡や日向洞窟、獅子内遺跡 VI 区の押型文に類似する。

平坂式は撚糸文土器群最終末期（中村 2022）に位置づけられ、北・東関東では天矢場式が併行する。繊維の混和や平底土器など異なる地域色も存在するが、ほぼ共通した様相を読み取ることができる。下ノ内浦遺跡の厚手無文土器と押型文土器の様相は青森県唐貝地貝塚下層や岩手県蛇王洞洞穴遺跡 VII 層、あるいは宮城県松田遺跡・鍛冶沢遺跡で捉えられた日計式の様相からは大きく乖離しており、関東

地方の撚糸文末期に併行する土器型式として、仮称「下ノ内浦式」を提唱したい。共伴関係は明らかではないが、岩手県盛岡市大新町遺跡（盛岡市教育委員会 1987・1990）には類似した押型文土器があり、その一部は併行関係にあると考えられる。

(4) 三戸式に伴う押型文土器（図 6）

関東・東北地方の縄文早期中葉の沈線貝殻文土器は神奈川県三浦市三戸遺跡出土土器を標式とする三戸式（赤星 1929）である。東北地方北部においても、唐貝地下層 b 類・c 類土器、あるいは白浜・小舟渡平式、蛇王洞Ⅱ式などが同式後半に併行するが、確実に押型文を伴う例は現在、知られていない。

一方、福島県以南の関東地方においては日計式の系統から生まれたと考えられる押型文や、中部高地

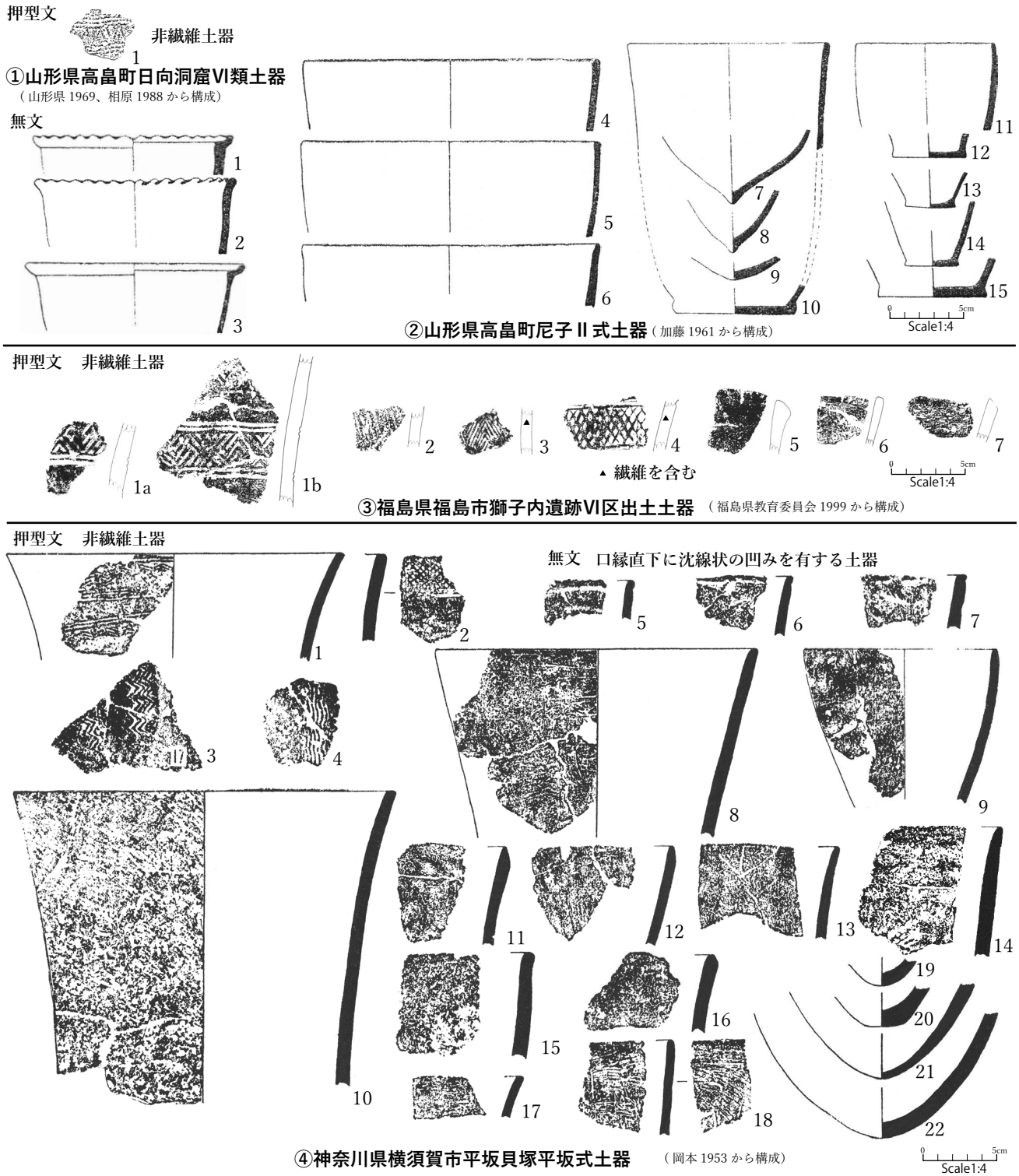


図 5　厚手無文土器と押型文土器

系、あるいは北陸系の押型文土器が伴出する。

①神奈川県三浦市三戸遺跡（図６①）

赤星直忠によって 1927 年に発見され、押型文では山形文・楕円文・格子目文が確認された（赤星 1929、山内 1935）。当初、繊維を含む土器はないとされたが、わずかに繊維を含む土器が少量あると改められた（赤星 1936）。戦後、武蔵野郷土館・神奈川県教育委員会によって発掘調査が行われ、その一部は『神奈川県史』他にも紹介されている。ここでは領塚正浩（1985）の採集土器による。

図６① 1 が多段の菱形文、2 が重複菱形文で内部に斜線を充填したものである。胎土に繊維を含まない。これらの「異形押型文」の類例として、長野県塞ノ神遺跡や秋田県岩井堂洞窟遺跡を提示した。また、他の押型文土器には金雲母が含まれ、中部高地からの搬入品の可能性があるとし、1・2 には金雲母は含まないことを記し、異形押型文土器と東北地方との関係について注目した。

現在、千葉県今郡カチ内遺跡や城ノ台北貝塚で確認される「複合山形文」や重複菱形文の押型文土器（吉田 1989）についても日計式の系譜をひく三戸式周辺に位置づけられるものであろう。

②茨城県北茨城市刈又坂遺跡（図６②）

刈又坂遺跡では、厚手無文土器から沈線貝殻文土器とともに、日計式や中部高地系、あるいは三戸式土器に伴う押型文土器が発見されている（原川・原川 1974、馬目ほか 1979、原川 1988）。特に平行線状押型文下に連続刺突を伴う土器は、福島県大熊町腰巻遺跡（中野 1994）においても確認されており、福島県浜通り地方から那珂川流域に広がる三戸式後半期の地域性のひとつと考えられる。

③福島県福島市獅子内遺跡 III 区（図６③）

調査は 1995 年に行われた（福島県教育委員会 1997）。標高 250m 付近の最上位段丘・上位段丘に立地する。平行線状押型文が多用される日計式押型文土器は鍛冶沢・羽黒神社西遺跡段階のものであろう。縄文施文土器は発見されていない。非繊維またはわずかに繊維を含む三戸式土器とともに、非繊維の格子目状沈線文とともに菱形格子目押型文が施された土器（7）が発見されている。三戸式土器の胴部には縄文や撚糸文がまれに施される（馬目ほか 1984）ことがあり、地文の一部の文様として菱形格子目文は継承されている。

5. 黒曜石製局部磨製石鏃について

1946・1948 年に茨城県花輪台貝塚[3)]の調査（吉田 1948・1988・1990）で、局部磨製石鏃が出土し、芹沢長介は関東地方の出土例をいち早く集成し、①

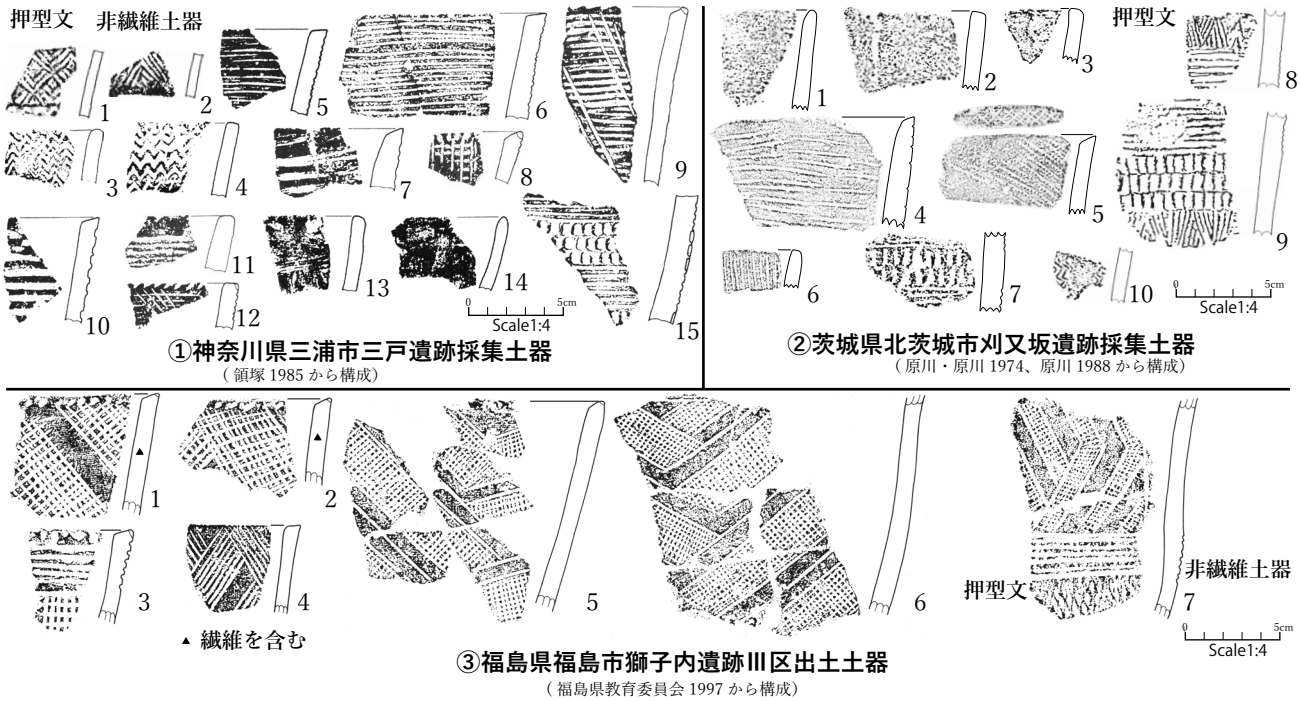


図６　三戸式土器と押型文土器

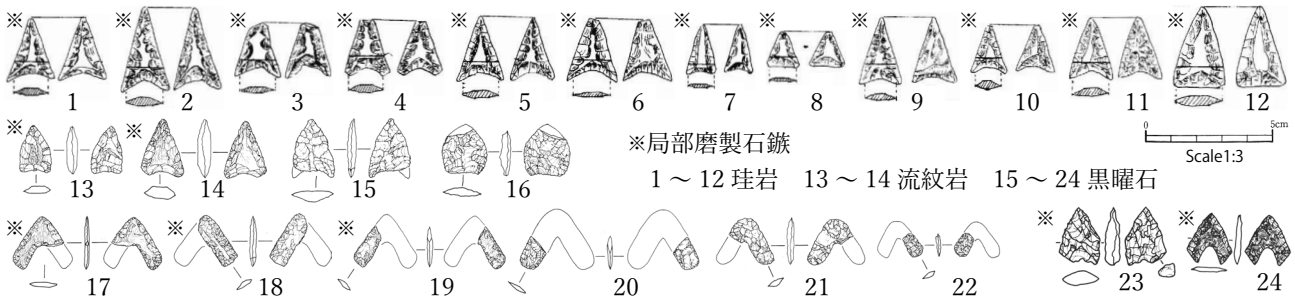


図 7　東北地方の局部磨製石鏃

三角形鏃（花輪台貝塚）、②長身の凹基鏃（東京都内：中村 2017 の堀込型）、③鍬形鏃（関東北部）の 3 類型を提示（芹沢 1949）した。

1961 年に宮城県蔵王町上原田遺跡を調査した林謙作は、薄手無文土器に局部磨製石鏃が伴出した（林 1965）とするが、不詳である（相原 2016）。福島県二本松市油王田遺跡（安達町教育委員会 1981）においても、局部磨製石鏃と器厚 5mm の薄手無文土器が出土しているが、共伴関係は不詳である。

福島県南相馬市宮平遺跡の珪岩製局部磨製石鏃（図 7- 1 ～ 12）を報告した竹島國基は、早期沈線文土器以降の土器に共伴したとは認めがたいとし、花輪台式周辺に伴うとした（竹島 1969）。

福島県いわき市竹之内遺跡（いわき市教育委員会 1982）から出土した局部磨製石鏃（図 7- 13・14、同 17 ～ 19）は三角形鏃と鍬形鏃の 2 類型がある。共伴関係は不明確としながらも、黒曜石製局部磨製鍬形鏃（17 ～ 19）と山形押型文土器の分布の重複から、搬入の可能性を指摘する。一方、長野県樋沢・細久保遺跡では局部磨製鍬形鏃は確認されず、長野県福応寺・二本木遺跡例を指摘し、流紋岩製局部磨製石鏃（13・14）は在地産石材によるとした。

宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡（宮城県教育委員会 1988）では黒曜石製局部磨製石鏃が 2 点出土している。三角形鏃と鍬形鏃である。時期は不詳である。

現在の押型文土器群と石鏃の編年観に従うのであれば、下ノ内浦遺跡の石鏃は樋沢式前半の楕円押型文を伴わない向陽台期以前に位置付けられよう。一方、東関東の天矢場式に伴うチャート製堀込型局部磨製石鏃とも異なる形態をしており、石材の原産地同定も含め、今後の課題である。

6. 仮称「下ノ内浦式」土器の年代

以上、仮称「下ノ内浦式」土器は、関東地方の平坂式に併行関係があるものと考えられる。

近年、千葉県船橋市取掛西貝塚（船橋市教育委員会 2021）において、撚糸文土器群の年代測定がまとまって公表されており、併行関係にあると考えられる取掛西第Ⅳ期（平坂式・天矢場式新段階）の 23T-001 号住の 3 点の試料（PLD-41372S3-4、同 41373S3-4、同 41374S3-4）の年代は 10,400-10,190 cal BP（小林 2021）とされ、これまでの天矢場式の年代 10,120- 9,690 cal BP (Beta-98257) とほぼ一致する。松田遺跡の日計式土器の年代 11,817- 11,311 cal BP、10,177- 9,905 cal BP とも整合する年代（相原ほか 2021）[4] である。

7. おわりに

仙台市下ノ内浦遺跡から東北地方における縄文早期前葉の土器編年について検討した。関東地方の三戸式や北陸地方の卯ノ木 2 式以降には僅かながら繊維が混和される土器が現れる。菱形の意匠を持つ押型文も中部・東海地方まで広く分布する。北海道では、大麻 1 遺跡の室谷下層式以降が不詳である。

東北地方の縄文早期の押型文文化の解明には、今後とも多くの課題が残されている。

謝辞

仙台市教育委員会・うきたむ風土記の丘考古資料館・高畠町教育委員会、馬目順一・岡本東三・橋本勝雄・阿部芳郎・小林謙一・領塚正浩・中村信博・神原雄一郎・佐藤智生・大工原 豊の各氏からご配慮とご教授を賜った。記して謝意を申し述べる。

【註】

1) 本稿執筆にあたり、下ノ内浦遺跡出土遺物の資料調査を行った。観察表中の「不明」「or」、空欄、あるいは明らかな誤観察については正した（図 1・2）。
2) 日向洞窟の押型文と同様の横刻み山形文、両端平行線の原体を縦回転した可能性もあるが、限られた器面からは特定に到らず、ここでは報告書の記載に従う。
3) 地元の収集家が一升桝約半分採集していた石鏃の形態は「長三角形、五角形をし、製作技法は薄く、表裏が局部磨製された石鏃も相当量みられ、石質はチャートに限られているようである。」（吉田 1988）
4) 松田遺跡第 1 次第 1 号住の年代は炭素量不足のため測定することはできなかった。

【引用参考文献】

相原淳一　1978「宮城県南部発見の菱形格子目押型文土器」『山麓文化』1, pp.12-17, 白石地方文化研究所
相原淳一　1988「東北地方の押型文文化をめぐって」『縄文早期を考える―押型文文化の諸問題―』
相原淳一　2016「宮城県における薄手無文土器の再検討」『東北歴史博物館研究紀要』17, pp.7-30
相原淳一・小林謙一・東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室　2021「宮城県における日計式土器とその周辺－東北歴史博物館所蔵資料から－」『東北歴史博物館研究紀要』22, pp.1-28
相原淳一・佐藤信行　2021「縄文早期中葉「大穴式」土器の再検討」『宮城考古学』23, pp.135-152
青森県教育委員会　1999『櫛引遺跡』263 集
赤星直忠　1929「相模三戸遺跡」『考古学雑誌』19-11, pp.37-41, 日本考古学会
赤星直忠　1936「古式土器の一形式としての三戸式土器に就いて」『考古学』7-9, pp.385-397
安達町教育委員会 1981『油王田遺跡発掘調査報告書』
伊東信雄　1957「古代史」『宮城県史』1
井上國男　1996「久慈川流域における縄文時代早期無文・沈線文系土器の様相」『論集しのぶ考古』
いわき市教育委員会　1982『竹之内遺跡』8 集
江坂輝彌　1957「考古だより（日計遺跡）」『貝塚』68
岡本 勇 1953「相模平坂貝塚」『駿台史学』 3 , pp.58-76, 駿台史学会
加藤 稔　1958「日向の尖頭器と早期縄文土器」『山形考古』5, pp.17-32, 山形考古友の会
加藤 稔　1961「東北裏日本における早期縄文土器の編年」『山形史学研究』3, pp.1-24, 山教史学会
加藤 稔　1967「山形県日向洞穴遺跡における縄文時代初頭の文化」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
小林謙一　2021「取掛西貝塚の炭素 14 年代測定に基づく年代的考察」『取掛西貝塚総括報告書』
笹津備洋　1960「青森県八戸市日計遺跡」『史学』33-1, pp.71-83, 三田史学会
佐藤達夫・渡辺兼庸　1958「青森県上北郡出土の早期縄文土器」『考古学雑誌』43-3, pp.74-78
佐藤達夫　1961「青森県上北郡出土の早期縄紋土器（追加）」『考古学雑誌』46-4, pp.42-43
芹沢長介　1949「半磨製石鏃に就いて」『考古学集刊』3, p.10, 東京考古学会
芹沢長介・林 謙作　1965「岩手県蛇王洞洞穴」『石器時代』7, pp.1-16, 石器時代文化研究会
芹沢長介・林 謙作　1967「岩手県蛇王洞洞穴」『日本の洞穴遺跡』pp.74-84, 平凡社
仙台市教育委員会　1988『下ノ内浦遺跡』仙台市文化財調査報告書第 115 集
仙台市教育委員会　1998『下ノ内浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第 207 集
大工原 豊編　2017『石鏃を中心とする押圧剥離系列石器群の石材別広域編年の整備』
竹島國基　1969「原町市宮平出土の局部磨製石鏃」『福島考古』10, pp.16-22, 福島県考古学会
武田良夫　1969「盛岡市上堤頭・小屋塚遺跡の押型文土器」『考古学ジャーナル』36, pp.8-12
千葉大学考古学研究室　2004『沖ノ島遺跡－第 1 次』
千葉大学考古学研究室　2004『沖ノ島遺跡－第 2･3 次』
登谷遺跡調査団　2002『登谷遺跡調査報告書』3 集
中野拓大　1994「福島県大熊町腰巻遺跡出土縄文早期の考古資料」『史峰』20, 新進考古学同人会
中村孝三郎・小片 保　1964『室谷洞窟』長岡市科博
中村信博　2017「堀込型石鏃の研究」『利根川』39, pp.1-8, 利根川同人会
中村信博　2022「船橋市取掛西貝塚における第Ⅲ期・Ⅳ期土器群の検討」『栃木県考古学会誌』43, pp.21-31
二本柳正一・角鹿扇三・佐藤達夫　1957「青森県上北郡早稲田貝塚」『考古学雑誌』43-2, pp.35-58
林 謙作　1965「縄文文化の発展と地域性　東北」『日本の考古学』II, pp.64-96, 河出書房新社
原川虎夫・原川雄二　1974「東北地方押型文土器の諸問題」『遮光器』8, pp.42-59
原川雄二　1988「日計式土器について」『考古学叢考』下巻 , pp.513-544, 齋藤忠先生頌寿記念論文集刊行会
福島県教育委員会　1997「獅子内遺跡（第 2 次調査）」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告 Ⅳ』338 集
福島県教育委員会　1999「獅子内遺跡（第 4 次調査）」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告 VIII』351 集
船橋市教育委員会　2021『取掛西貝塚総括報告書』
馬目順一ほか　1984「大平 A 遺跡」「大平 B 遺跡」『大熊町史』大熊町教育委員会
宮城県教育委員会　1988『大梁川・小梁川遺跡（石器編）』宮城県文化財調査報告書第 126 集
盛岡市教育委員会　1987『大館町遺跡群　大新町遺跡』
盛岡市教育委員会　1990『大館町遺跡群　大新町遺跡』
山形県 編　1969『山形県史　資料篇 11　考古資料』
山形県埋蔵文化財センター　2020『羽黒神社西遺跡』山形県埋蔵文化財調査報告書第 239 集
山内清男　1935「古式縄紋土器研究最近の情勢」『ドルメン』4-1, pp.34-44
吉田 格　1948「茨城縣花輪臺貝塚概報」『日本考古学』1 , pp.27-33, 日本考古学研究所
吉田 格　1951「青森県発見の押捺文土器」『考古学ノート』4, pp.3-4
吉田 格　1988「縄文早期花輪台式文化」『考古学叢考』下巻 , pp.459-479, 齋藤忠先生頌寿記念論文集刊行会
吉田 格　1989「千葉県城ノ台北貝塚の日計式押型文土器」『立正考古』29, pp.3-4, 立正大学考古学会
吉田 格　1990「花輪台貝塚」『吉田格コレクション考古資料図録』立正大学学園
立正大学考古学会　2007『吉田格氏収集寄贈　縄文文化資料』
領塚正浩　1985「三戸式土器の検討」『唐澤考古』5, pp, 17-28, 唐澤考古会